

手元にいつもあなたが

弔い縁ありて⑧

ニッポン 人・脈・記 jinmyaku@asahi.com

俳優の穂積隆信(78)は、ベッド脇のテーブルに、高さ20センチほどの卵形の石を置いていた。「おはよう」「おやすみ」。話しかけ、なでさする。妻が脳梗塞で入院した昨年からは、石に向かって相談することが多くなった。「由香里、お母さんが倒れちゃって、どうすればいいんだろ」と

花崗岩を加工した石には空洞があり、金属のカプセルが入る。穂積はその中に、7年前に35歳で亡くなった一人娘の遺骨の一部を納めた。「位牌だと仏様だけど、由香里は、僕の中では、まだ仏様になっていない。この石があると身近に感じるようで、ぬくもりさえ感じるんです」。穂積は目をぬく。

2人の親子関係は、1982年に300万部の大ベストセラーとなった「積木くずし」で知られる。中2で不登校、シンナーなど非行に走る娘との壮絶な葛藤を描いた実話。だが、本当の積木くずしが始まるのは、出版の後だった。

教育評論家として穂積が脚光をあびる一方、由香里には「積木くずしの娘」のレットルが張られる。翌年、由香里はトルエン所持で補導。穂積は一転、世間からベテן師扱いされる。前妻との離婚、金銭トラブル……。家族は崩壊した。

「僕が死んだら、これも一緒に一緒にいたい。穂積は、あの石を香川の業者に注文した。

「僕が死んだら、これも一緒に一緒にいたい。穂積は、あの石を香川の業者に注文した。

穂積が石を頼んだ香川の業者が参加するNPOがある。「手元供養協会」。5年前、石、焼き物、ペンダントなどに遺骨を入れ、手元に持ち続ける弔いの方法を広げようと発足した。

その代表、山崎譲二(60)は、京都市内の事務所に出勤すると、パソコン脇の置物にたはこを一本供える。置物の中には父母の遺灰が入っている。「供養する」というより、毎日、両親に励まされています」

山崎譲二さん。両親の遺灰を入れた手元供養品とともに



父を尊敬していた。松山市明治から続く魚屋の3代目。の料理人が父の目を頼って店した。経営を人に任せて店傾いても、命を取られたわけやない、と淡々としていた。

その父ががんで余命1年とったのは、02年の正月だった。山崎は、好き勝手ばかりしてきた自分を悔いた。日大時代アジアを放浪し、卒業後は都開発の仕事に夢中だった。たの帰郷のたび、足腰が弱ってさくなつていく父の姿に、気かないふりをしていた。

せめて「く」なつたあとも感じたい。墓は兄が継ぐので、近に父を感じられる方法はないのか。試行錯誤をして1年、水焼で置物を作る。

病床の父に見せた。「ここにおよの骨を入れて手元に置ておくれりた」。ああ、いなあ」。ほほえんでくれた

1年後、永眠した。遺骨の一を瀬戸内海に散骨し、父の好だった高野山にも納骨。残り3人きょうたいで分けた。

自分と同じ思いの人は多い。と山崎は手元供養品の会を始めた。神戸の生協に持ちひと、「せひ扱わせて!」。

神大震災で身内を失くした組員から、まさに要望されている品だといふ。

自信を深めた山崎は、NPOをつくる。参加する会社は、ま7社。年に1万5千個の品出ている。(星野哲



穂積隆信さん。由香里さんの遺骨が入る石には法名が刻まれている